

看護と文献

看護職員への利用促進の試み

首藤佳子

昨今、どこの病院でも看護職員の文献利用が増えてきているようである。従来は医師の利用が主であった図書室でもこれら看護職員のニーズに対応を迫られることになった。そこで、本稿では星ヶ丘厚生年金病院における看護職員の利用の動向と実際に行っている利用案内、利用指導について報告したい。

1. 利用促進をはかる意味

なぜ看護職員の利用促進をはかることに意味があるのか、はじめに少し整理をしておきたい。

(1) 医学・医療の進歩や考え方の変化

ここ数年、医療や看護に関する考え方が変化してきている。在宅ケアや患者のセルフケアの推進、インフォームドコンセントの浸透、移植や脳死の論議、等々医療関係者が取り組むべき課題が多様化した。また、看護分野においても看護婦の専門性の拡大や新しい看護体制が試行されることが多くなり、現場ではこれらの新しい動向や考え方を実践しなければならなくなってきた。

医学や医療技術の進歩も現場で働く看護婦には大きな影響を与えている。新しい知識、新しい技術、新しい機械の操作など、日常業務上修得すべき事柄が増えてきた。更に、情報技術の進歩により看護情報処理や業務手順も変化しつつある。

一方、看護教育面でも看護大学や看護短大

すとう よしこ：星ヶ丘厚生年金病院

などが次々と設立され教育体制が充実してきた。「看護研究の推進」の流れの中で、臨床現場でも研究発表が盛んになった。

また、生涯教育や資格を重視する一般的な風潮を反映して、大学の通信教育をうける看護婦や介護福祉士、社会福祉士、臨床工学士などの資格を取得する看護婦も多くなった。

このように臨床面、教育研究面、自己啓発の面からも日常的な学習が必要となってきている。

(2) 看護関係文献量の増加

看護関係の研究が盛んになるにつれて看護文献の量も増加してきている。この10年間に創刊された看護関係雑誌の種類は多く、医学中央雑誌CD-ROM版で1990年～1994年の看護学文献件数の推移〔表1〕をみても、この5年間で文献数は約2倍になっている。

〔表1〕

1994年	10158件
1993年	9960件
1992年	8127件
1991年	7951件
1990年	5265件

これらの文献を調査したり、入手・活用するには、図書館の資料や機能の活用が必要となってくる。

(3) 病院図書室利用者に看護職員の占める割合
病院図書室が全職員をサービス対象とする

なら、看護職は決して無視し得ない集団である。当院を例に挙げると、1995年3月末現在で全職員781名のうち看護婦は360名、全体の46%を占めている。図書室が看護職員に対するサービスを強化し、利用の促進を図ることはその本来の役割から言っても矛盾はしないし、またそうすべきであると思う。病院の質の評価に看護職員の質がかかわる部分は決して少なくない。

2. 当院看護職員の利用の動向

ここで、簡単に当院看護職員の利用動向を見てみたい。

(1) 図書館サービスの利用状況

資料の貸出、文献検索、相互貸借など図書館サービスを利用した人を職種別に見ると、医師が50~60%、コメディカルが30%前後、看護職員は約16%である。この割合はここ数年ほとんど変化なく推移している。

しかし、コンピュータによる文献検索を例にとると割合は変わらないものの、[表2]のように検索件数は確実に増加している。マニュアル検索についても1990年当時と比較するとかなりの増加しているが、やはり医学中央雑誌CD-ROM版の導入とその利用指導が大きな効果を挙げたと言える。

[表2]

1990年オンライン文献検索
看護婦 44件/282件(16%)
1994年CD-ROM文献検索
看護婦 158件/950件(17%)

(2) 利用の内容

以前は図書室所蔵資料の貸出がほとんどであったが、現在は文献検索、文献入手などが多くなり、その主題やリクエストの内容が多様化する傾向が顕著である。

(3) 利用増加の要因

このように利用が増加した要因をいくつか思いつくまに挙げてみる。

①看護研究発表が増えたこと

院内、院外での看護発表が増えたことは大きな要因の一つである。院内看護研究発表会は年1回、2日間にわたって開かれ、演題数も1973年の6題から1994年には21題に増えた。また、院外の各種学会(日本看護学会、近畿地区看護学会、日本社会保険医学会など)の発表も1975年には5題、1980年頃から徐々に増えて1994年には12題となっている。その他、この2~3年は各種看護関係雑誌への投稿も目立って増えてきた。

②看護部教育委員会で図書室所蔵図書の活用を計画し、1990年より新着雑誌のコンテンツサービスを開始した(1回/月)。また、看護関係所蔵図書目録を作成し、各病棟や関係部署に配布し毎年更新している。

③看護研究委員会で1990年より年1回文献の活用に関する定例研修会を開いている。講義要項や利用マニュアルなどを関係各部署に配布。講師は図書室担当者。

④看護関係図書、雑誌、二次資料の充実

1990年より所蔵資料の充実に努めるようになった。購入図書や雑誌数が増え、特に従来の二次資料に加えて「最新看護索引」(日本看護協会看護研修センター図書館)を1987年に遡って購入した。また、1993年より「医学中央雑誌CD-ROM版」を導入、看護婦に対する普及に努めた。

⑤看護婦の院外研修の効果

昨今、看護婦が院外の長期研修に行くことが多くなり、文献活用に関心を深める機会が多くなった。

このようにしてみると、看護界の動向がその背景にあるとしても、実際の利用の増加に関しては人手をかけた利用促進の試みが徐々に効果を顕していると言える。そして、この効果をより確かなものにするためには図書室と看護部の協調、連携がなによりも大きなファクターであることがわかる。

3. 当院で行っている利用指導の実際

当院では毎年2月半ばに看護部研修会で卒業後2~3年の看護婦を対象に文献検索を中心

とした利用指導を行っている。参加者は毎年約50～60名、時間は約2時間。当院図書室の利用案内、医学看護関連情報・文献に関する一般的なガイダンス、文献検索の実際、の3点を中心に講義、実習などをまじえて実施している。

(1)当院図書室の利用案内

まず図書館という機関について、またさまざまな館種の図書館についておおよそのガイダンスをした上で当院図書室の利用案内を行っている。主な項目は以下のとおり。

- ①図書室の位置
- ②利用できる時間
- ③蔵書案内
冊数と種類、看護関係所蔵図書案内、資料の配置、蔵書の探し方etc.
- ④図書室の機能と利用の仕方
閲覧、貸出、複写、検索、相貸、購入リクエスト、製本や図書購入の斡旋、レファレンスサービスetc.
- ⑤所蔵二次資料と主な参考図書
- ⑥看護部との連携について

(2)医学看護情報・文献に関する一般的なガイダンス

- ①文献に関するガイダンス
文献とは何か、文献の種類、学術情報の発生と流通の仕組みと文献、主な看護関係雑誌と二次資料、看護関係の出版社etc.
- ②文献発生量の推移
- ③看護文献の特性
- ④ニューメディアの紹介

(3)文献検索の実際

- ①文献検索の意味
なぜ文献検索が必要か
- ②文献検索の種類と方法
文献検索の目的と検索の種類・方法
- ③検索ツールの解説
主な検索ツールの説明(収載誌、タイムラグ、編集方法etc.)
- ④文献検索時の注意事項
検索目的に合った検索方法、ツールの

選択

検索ツールの使い方

検索主題の分析とキーワードの選択
応用力の大切さetc.

- ⑤検索結果の見方と文献の評価・選択
- ⑥検索結果の保存
- ⑦原報入手の方法と手続き
原報入手先の簡単な紹介
- ⑧原報入手後の処理
ファイリング、クリッピング、文献カードetc.

(4)文献検索の実際

当院所蔵の二次資料中から「最新看護索引」のカレント版、累積版を使った検索と「医学中央雑誌CD-ROM版」による検索を実習する。日本看護関係文献集は割愛、またオンライン検索は担当者が代行しているため省略している。

- ①検索ツールの特徴をより詳しく説明する。
- ②当院のハード環境に合った検索マニュアルを作成し、それに沿って担当者が実際の検索を行ってみる。
- ③検索例題と実習
実習で使うツールの仕組みがよく分かり、機能を活用できるような検索例題を作成し、実際の検索をしてもらう。この時、各職場ごとに最低一人はアウトラインを理解してもらうように配慮している。
- ④文献の活用についての若干の解説
- ⑤参考文献の書き方

4. 利用促進に果たす利用指導の効果と課題

当院で行っている利用指導は以上のとおりである。その効果はすべてを数値で表わすことができないため今一つ明確ではない。しかし、最近図書室を利用する看護婦や自分で検索する看護婦の数が目立って増えたのは確かなことで、自分が知りたい事柄について、そのつもりになれば調べる手段があり、しかるべき手順を踏めば文献を見つけることができること、原報の入手も可能であることはわ

かってもらえたと思っている。更に、自分の病院の図書室だけでなく、地域の図書館など図書館の機能やその活用についても少しは認識してもらえたように思っている。稀にはあるが、調べるおもしろさがわかったと報告に来る看護婦もいる。

その一方で、こうした研修会での利用指導は多くのことを詳しく知ってもらうにはあまりにも時間が限られている。また、集団を対象にした講義形式は内容の定着にも限界がある。そのため、その時々に応じて、看護部の担当婦長と相談しながら重点項目を決めたり、各部署で研修を受けた看護婦を中心にもう一度おさらいしてもらうこともある。その際には研修会直後から数ヶ月にわたって予約によるグループ指導、個別指導を約束することになっている。

一人担当者がこうした利用指導を受け持つのは時間的にも能力的にもかなり負担である。講義要項や資料の作成、マニュアルの作成などの他に、実際の利用に伴って個別指導、文献入手などの業務が確実に増えてくる。しかし、その反面いろいろと学ぶことも多い。人に教えるということは何よりも教える側の学習になり、普段は接触の少ない看護スタッフとの良いコミュニケーションの場ともなる。

看護婦に対する利用促進の試みはそれなりの意義と効果があるが、それを支える図書室の施設・設備や蔵書の整備、サービス強化、マンパワーの確保が必須である。もっとも基本的なこれらの事柄が病院図書室にとってはやはり解決すべき最大の課題と言えそうである。